

会話におけるあいづちのタイミング考察

廖佳怡 上原聡

(東北大学)

1 はじめに

人と人との付き合いでは、会話が人間関係の発展に重要な役割を果たしている。緊張や不安の気持ちがなく、会話がうまく進むと、人の距離も近くなる。従来の多くの研究で指摘されているように、会話のなかで、日本語会話ではあいづちは会話を円滑にする役目を果たしている。聞き手が話を聞きながらあいづちを入れる頻度は日本語会話では英語や中国語より高いと言われている。あいづちは、理解や同意などを示す聞き手の言語行動なので、もし、聞き手が一切あいづちを打たずに、黙って聞いていると、話し手はたちまち不安になって、会話をやめてしまう(水谷 1988)。つまり、あいづちが日本語会話の流れでは重要な役割だと言えよう。そこで、本研究はあいづちのタイミングの実像を明らかにし、日本語会話がどのようなリズムで進んでいるかを解明することを目指す。

2 先行研究

先行研究では、聞き手の積極的な働きかけとしてのあいづちの役割をさまざまな視点から分析している。その中で、あいづちのタイミングと話し手の発話速度との関連については、中里(2002)が、聞き手からあいづちをコントロールし、(1)聞き手が自然なタイミングであいづちを打つ、(2)不自然なタイミングではないが聞き手がより早くあいづちを打つ、という二つのパターンを設定し考察した。実験の分析では、聞き手があいづちのタイミングを早く打つことにより、話し手は自分の対話の適切なリズムがくずれたと認識し、適切なリズムを維持するために発話速度を調整することが観察された。よって、聞き手のあいづちの打ち方が対話の速度を管理する機能を持ちえると結論付けた。

発話途中に打たれるあいづちの機能については、永田(2004)が、二十代の大学院生を対象に全部で5つの自然談話を分析した。その調査から、ポーズのところで打たれたあいづちは発話途中で打たれたあいづちと比べて圧倒的に多いという。あいづちはここで反復型と単独型と分けられる。まず、反復型あいづちが打たれる場合には、発話途中で打たれることが多い。そして、発話途中に反復型のあいづちが打たれた場合には、次のポーズに、あいづちを打った側に turn が移行する割合が大きくなる。それに対して、発話途中でも単独型のあいづちにはそういう傾向が見られない。単独型あいづちについては、単独型の概念的あいづち(例えば、「そうですね」など)が発話途中で打たれる場合には、ポーズの時に比べて、その後の turn の移行が極端に少ないという。結論として、談話におけるあいづち行動は受動的・消極的な側面だけでなく、聞き手があいづちという手段によって、聞き手役割を演じつつも、自ら談話の展開をコントロールしようとする積極的な側面も持つと言える、とした。

3 本研究の方向性

3.1 話し手の観点からの分析

中里(2002)及び永田(2004)では聞き手が会話の中で積極的な働きを持つということを解明したが、聞き手のあいづちの役割の観点から分析した先行研究に対して、本研究では話し手の役割の観点から分析する。すなわち、本研究では話し手が発話している間にポーズを置いているときとポーズを置かないときに、聞き手があいづちを打つそれぞれのタイミングについて分析するのである。

3.2 あいづちの定義

堀口(1997)が指摘しているように、あいづちの

定義が明確には一致していないため、機能や形式もどこまでをあいづちの機能あるいはあいづちの表現形式として認めるかは研究によって相違があり、その結果頻度にもあいづちの違いが見られる。「はい」、「ええ」などのあいづちの典型的な表現だけに着目する研究もあるが、本研究ではメイナード(1993)と永田(2004)を参考に、あいづちの定義を「話し手が発話権を行使している間に、または話し手の発話の終わりに聞き手が送る短い表現」とし、より広義

に定義する。しかし、話し手が積極的に応答を求めたもの(質問、呼びかけなど)に対する答え、あるいは聞き返しや情報確認の表現もあいづちとしない。

4 データ及び考察

4.1 データ

本研究では、インターネット上のラジオ番組の内容を録音したものを分析してみた。ラジオ番組は以下の図1のような流れが考えられる。

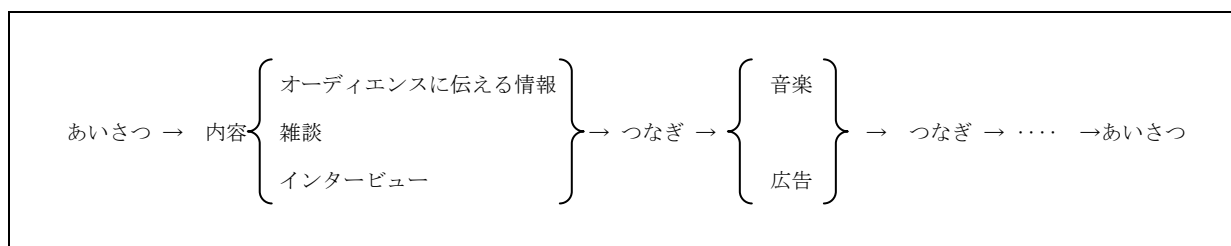


図1 ラジオ番組の流れ

音楽や広告以外の部分にDJ同士の対話や、DJとゲストまたは外部の人(Call inやCall outの場合)との対話がある。「あいさつ」と「つなぎ」、そして「オーディエンスに伝える情報」の部分では、「はい」、「うん」などのあいづちも見られたが、聴衆に向けて話す発話なので、会話でのあいづちとしない。今回取ったラジオ番組は、DJが歌手とギタープレイヤーというコンビで、音楽を紹介する番組である。取った会話は2005年6月3日と17日にインターネットにアップロードされた、2回の番組から抽出さ

れた内容である。番組はトランペット特集ということで、トランペットが特徴的なジャズの曲を紹介し、それについて話し合う。今回のデータでは、ゲストがいなくてインタビューがないので、DJ二人の雑談の部分だけを分析の資料にする。

4.2 あいづちのタイミング

日本語の会話は、下の図2に示されるように、turnが移行するかしないかに関わらず、話し手の発話と聞き手のあいづちが交替で現れて、「共話」(注)の場面が作られる。

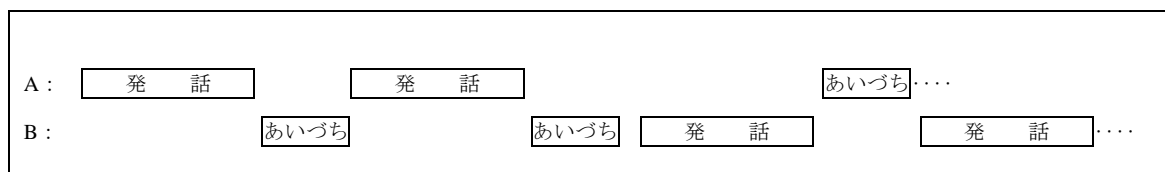


図2 日本語会話モデル

水谷(2001)では、あいづちを多用しながら相手と共話的に話し進む場合、発話の単位はいわゆる文ではなくて句であると述べられている。すなわち、話し手が句と句の間にポーズを置いて、聞き手がそこにあいづちを打つ、というのは典型的な日本語会話のリズムである。しかし、あいづちが発話途中に始まる場合もある。ここでいわゆるあいづちのタイミ

ングは、発話終了の時点とあいづち開始の時点に着目するのである。

4.3 ポーズとあいづちのタイミング

水谷(2001)では句という単位があげられたが、本研究では、ポーズとポーズの間を「節」とし、それであいづちのタイミングを分析する。ここでは、まずポーズとフィラー(filler)について述べたい。ポ

ーズというのは、話し手が聞き手にある発話をし、聞き手のその発話に対しての反応を求めるときに一度発話を中断する時間を指す。ポーズのマーカースとして、①1つの母音に2拍あり、イントネーションが下がる②「ね」「さ」などの間投詞というのが考えられる。フィラーというのは、話し手が発話し、適切な言葉を探しているときに入れる言葉であり、新しい情報がなく、最後の母音が伸びてイントネーションが平らであるという言葉の指す。そういうときの発話の中断は節の終わりとししない。本研究では、節が短い場合と節が長い場合では、あいづちがそれぞれどのようなタイミングで打たれるのかを考察する。

まず、節が短い場合では、次の対話例1のようにあいづちが発話のポーズのところに現れることが多いと見られた。(「/」は節の区切り点である。)

対話例1

M: ジョンコルトレン/ ジョンコルトレンさんね/ えー
F: /はい /うん
M: 僕も一まあ大好きでございまして/ えーとまあなんって
F: /はい
M: いいですかね まあ いわゆるこう その一テナーサック
F:
M: スの/ もー まで巨人ですよ/
F: /うん /はい

対話例1では、聞き手がポーズのところにあいづちを打っている。話し手がフィラーを入れて適切な言葉を探しているというときは、中断する場合もあるが、それは話し手の発話途中と見なされ、ポーズと認められない。例えば、対話例1に現れた「えーとまあ なんっていいですかね」というような発話はフィラーだとする。では、フィラーのときに現れる発話の中断はなぜあいづちが見られないのか。それは、フィラーは話し手が自分の発言を続ける意図を示すという機能が働いていて、聞き手がその目的を認識しあいづちを入れなくて話し手の次の発言を待っているのではと思われる。

しかし、フィラーのときでも、あいづちが打たれるということが観察された。次の対話例2である。

対話例2

M: えー次はですね/ まあこのね 人も/ まあちよつと
F: /はい /うん
M: なんっていいですかね こーすごいですね/
F: うん /うん

対話の流れから見ると、話し手のMは発話が「えー次はですね」のところから話題を変え、スローダウンとなっている。しかし、聞き手のFはまだそのスピードの変化に対応できないため、新しい情報のないものの、フィラーのあとの一時中断にもあいづちが現れたのではないかと考えられる。一方、前のリズムを保とうとする働きかけも考えられる。

それに対して、節が長くて話がどんどん進んでいく場合は、あいづちが節がまだ切られていないという発話途中に現れたことが見られた。次の対話例3のような対話である。

対話例3

M: えーと 僕らもちろん作曲作詞して歌につながっていつ
F:
M: てそれがみんなの演奏につながってそれがもう最後に
F: うん
M: アーサブルにつながっていくという まあそういうレコー
F:
M: ディンギーができたというのはね/ ほんとに えー今回
F: /うん
M: のえーまあ満足 ポイントといいますかね/
F: /そうやね

Mの発話は「えーと」というフィラーで始まり、その後の発話には3行目の「というのはね」のところまではポーズが入れられなかった。しかし、Fの最初の「うん」というあいづちは、発話途中に現れた。その次のMの発話では、「ね」という明らかなマーカースとして、話し手の「あいづちを打ってください」の合図が現れた後にFのあいづちが出ている。最初のあいづちはなぜ発話途中に出てきたのかにつ

いては、対話例3はDJ二人の自分のアルバムについてであり、この話題に共同の経験を持っているのである。Mの発話の一節では情報量が多く、Fは自分の共感を示す意欲があつて、Mがまだ発話し続けるかどうかと関係なく、最初の「て」という中止形のところにあいづちを打ったのではないかと思われる。

5. 結論及び今後の課題

以上、ポーズとあいづちのタイミングについて考察してみた。日本語の会話では、話し手と聞き手が協力して会話を完成する「共話」の場がえられる。聞き手は黙って聞くということより、あいづちによって自分が会話に参加しているという積極的な態度を示している。話し手はポーズによって聞き手のあいづちを求め、聞き手の気持ちを確認しながら会話のリズムをコントロールしようとするが、聞き手は必ずしも話し手のポーズに従ってあいづちを打っているというわけではない。とはいえ、そのような会話は日本語会話の典型的な形が崩れていても、話し手と聞き手の気持ちに食い違いがあるというわけではない。にもかかわらず、共感を持っている場合が多いだろう。

今回のデータはラジオ番組なので、オーディエンスを楽しめるために、普通の会話よりあいづちの頻度が高くなっているが、筆者の観察では、同じくラジオ番組であっても、中国語や英語のラジオ番組に比べてみると、日本語のラジオ番組での会話におけるあいづちが特徴的であつて、話し手と聞き手が「共話」によって楽しいしゃべり場を作るとするのはラジオ番組にも取り入れられているのであると思われる。

今回の資料は少ないため、言語現象は個人の発話特徴に左右されやすかったり、ある特定の場面に限られたりするもので、これからはデータを増やしてあいづちが現れたタイミングの頻度を数え、その傾向を見たい。その上、あいづちの形式や機能がどのようなバリエーションがあるかをさらに考察したい。

謝辞

本研究は、平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金(No. 15520241)の補助を受けて行われています。

注：水谷(1988;2001)によると、日本語会話では高い頻度のあいづちによって、「対話」ではなく、話し手と聞き手が協力して会話を完成する「共話」の場がえられるということが述べられる。

参考文献

- 杉藤美代子(1993)「効果的な談話とあいづちの特及びそのタイミング」『日本語学』第12巻第4号 pp. 11-20
- 泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版
- 塚原渉/ワード・ナイジェル(1997)「理解を介さない会話現象としてのあいづち」『言語』Vol. 26 No. 10 pp. 90-97
- 中里収(2002)「あいづちのタイミングと話し手の発話速度との相関について」『人工知能学会研究会. 言語・音声理解と対話処理』34号 pp. 57-62
- 永田良太(2004)「会話におけるあいづちの機能—発話途中に打たれるあいづちに注目して—」『日本語教育』120号 pp. 53-62
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』第7巻第13号 pp. 4-11
- 水谷信子(2001)「あいづちとポーズの心理学」『言語』Vol. 30 No. 7 pp. 46-51